

論文

幼児における運動への好意度の変化

—Active Child Program を通して—

The Changes in Preference for Physical activity in Young Children: Through the Active Child Program

玉瀬友美 (高知大学教育学部)¹ 矢野宏光 (高知大学教育学部)¹中塚健太郎 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部)² 幸篤武 (高知大学教育学部)¹宮本隆信 (高知大学教育学部)¹ 山本英作 (高知学園短期大学幼児保育学科)³前田和範 (高知工科大学経済・マネジメント学群)⁴ 大崎優 (高知大学次世代地域創造センター)⁵中山美香 岡谷里香 大西美玲 (高知大学教育学部附属幼稚園)⁶ 宮田信司 (高知大学教育学部)¹TAMASE Yumi¹, YANO Hiromitsu¹, NAKATSUKA Kentaro², YUKI Atsumu¹,
MIYAMOTO Takanobu¹, YAMAMOTO Eisaku³, MAEDA Kazunori⁴, OSAKI Suguru⁵,
NAKAYAMA Mika⁶, OKATANI Rika⁶, ONISHI Mirei⁶, MIYATA Shinji¹*1 Faculty of Education, Kochi University**2 Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University**3 Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College**4 School of Economics & Management, Kochi University of Technology**5 Center for Regional Sustainability and Innovation, Kochi University**6 Kindergarten affiliated with the Faculty of Education, Kochi University*

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the effects of exercise on the preference for physical activity in young children. Active Child Program (ACP) is a program that aims to promote children's psychological and physical growth through group play, and exercise play based on ACP was conducted for 5-year-old children by their homeroom teacher. Then, before and after the exercise play, the target children were asked about their liking for the 28 basic movements.

The results showed that "lying down," "walking," "running," "jumping," "dodging," "sliding," and "rolling" tended to be selected as favorite movements. And there was a significant difference in the degree of preference for the "pull" movement before and after the exercise play. From the results of this study, it was clarified that, in early childhood, it is possible to enhance children's preference for physical activity by experiencing the fun of playing in a group, rather than by enhancing their individual movement skills.

I. 問題

幼児期は、心身ともにめざましい発達を遂げる時期である。とりわけ体を十分に動かして遊ぶことを通して育まれる運動の発達によって、幼児は移動する範囲を広げ、操作する対象を増やし、自分を取り巻く世界への探索活動をさらに活発に展開させていく。幼稚園教育要領に明記されている幼稚園修了時の幼児の具体的な10の姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の(1)には「健康な心と体」があげられており、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせることの重要性が示されている(文部科学省,2018)。そして、児童期は、幼児期までに獲得された運動をいろいろな場面や状況に応じて活用し、さらに巧緻化していく時期であり、「スポーツ的運動技能」が学習されていくといわれている(澤江,2007)。つまり、幼児期は、生涯にわたってスポーツを楽しみ、健康な生活を送るための基礎的な運動習慣を形成する重要な時期であるといえよう。

しかし、近年、科学技術の飛躍的な発展や都市化・少子化の進展などによって、主体的に体を動かして遊ぶ機会が減少していること等を考慮して、文部科学省は「幼児期運動指針」を策定している(文部科学省,2012a)。「幼児期運動指針」は、「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」「楽しく体を動かす時間を確保すること」「発達の特性に応じた遊びを提供すること」に重点を置いており、運動習慣の基礎づくりを通して、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うだけでなく、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育てることをその目指すところとしている。

幼児期は、身体発達が進むとともに様々な運動遊びに取り組むようになり、運動が「できる」「できない」が明確になってくる時期であり、他児と比較して自己の運動能力を評価できるようになってくることから従来の研究において報告されている(中澤・泉井・本田,2009; 渡辺・湯沢,2012)。また、森(2003)は、「幼少期においては、自己の能力をどのように捉えるかということが、運動を好きになつたり嫌いになつたりする大きな要因のひとつになる」と指摘しながらも、「幼児期は、できる楽しさを強く求めるよりは、運動すること自体が楽しいという経験を十分に積むことが重要」と述べている。

運動に楽しみながら取り組むことや、体を動かす気持ちよさを体験することの重要性は、幼稚園教育要領の5つの領域の中の「健康」においても示されている。領域「健康」の「内容」においては、「いろいろな遊びの中で十分に体を動かすこと」や「様々な活動に親しみ、楽しんで取り組むこと」、「内容の取扱い」においても、「幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の

発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。」が明記されているのである(文部科学省,2018)。

このように、特に幼児期においては、保育者や他児との温かい関係の中で運動することの楽しさを感じ、運動が好きになることが重要ではないだろうか。そして、好きな遊びに没頭し、主体的・積極的に活動に取り組む経験を重ねることを通して、運動発達も進んでいくことが期待される。従来の研究において、「幼少期における楽しい運動体験が運動好きの子どもを育む」ことが指摘されているが(青野,2018)、実証的に検討した研究は見当たらない。

本研究の目的は、幼児における運動に関する好意度に及ぼす運動遊びの影響を検討することである。

ところで、日本スポーツ協会は「外遊びやスポーツに消極的な子どもは、必ずしもその活動自体が嫌いなのではなく、能力差などによって初めから結果が明らかな活動に『面白さ』を感じていない」「子どもの身体活動量を増やすためには、まず『楽しそう』『やってみたい』と思わせる工夫が必要である」とし、遊びの体験を通して体を動かすことや人と交わり協調することを自発的・積極的に行うことができる子どもを育み、心理的、身体的な成長につなげることを目的としたActive Child Program(以下、ACP)を開発している。ACPには発達段階に応じた多数のプログラムがあり、指導者や他児と「みんなで」遊ぶことが重視されており、「運動が苦手あるいは無関心な子供をも対象にしたアプローチ」である(日本スポーツ協会,2018a,2018b)。

本研究では、幼児期における集団での運動遊びの楽しさを重視した活動としてACPを取り上げ、ACPにもとづく集団での運動遊びが幼児における運動への好意度に及ぼす影響を検討する。

II. 研究の方法

対象児

幼稚園年長児14名(男児4名、女児10名)を対象とした。平均年齢は5歳8か月(range:5:4-6:1)であった。

材料

①運動する姿が描かれた絵カード

本研究では、「幼児期運動指針」において「幼児期に経験する基本的な動きの例」として挙げられている28の「基本的動き」(Figure1)に対する幼児の好意度を測定した。

「基本的動き」は、基本的に「ひとりで行う動作」であり、他者との社会的比較に基づいた「できるから好き」「できないから嫌い」という判断が生じにくいと考えたためである。

「基本的な動き」のイラストをコーティングした6cm×6cmのカード28枚を使用した。カードのイラストは

Figure1 と同様であるが、「立つ」「座る」などの文字は消し、イラストに描かれている幼児の顔は空白にして特定の表情が読み取れないように加工した。

②分類箱

15cm×21cm×3cm の箱を用いた。箱の内部は均等な3つのスペースに仕切られており、それぞれのスペースに3種類の表情図（ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ）が貼付されていた。

手続き

ACP 活動

本研究では以下の3つの運動遊びが実施された。活動内容は、幼児の運動発達や興味を考慮して、ACP プログラムの中から担任保育者が選択したものであり、所要時間は約30分間であった。

1 新聞紙に変身

保育者は広げた新聞紙を持ってジャンプしたり、新聞紙を大きく上下させたり、回したり、丸めたりしながら遊戯室の中を大きく動き回り、幼児たちは新聞を持たずに保育者の全身の動きを模倣して大きく体を動かす。

2 爆弾ゲーム

保育者は、遊戯室の中央にポール立ててスズランテープを張り、2つのエリアに分け、新聞紙を丸めて作られた黄色と紫色のボールを両方のエリアにばら撒いた。幼児たちは2つのチームに分かれ、スタートの合図後に自陣にあるボールを相手チームのエリアに投げ入れた。自陣のボールが少ない方が勝ちである。「手に取るボールは1つだけ」などのルールがあった。幼児は走ってボールを拾い、相手コートへボールを投げた。対戦が終わると幼児はその場にしゃがみ、ボールをみんなで数えた。

3 修行オニ

遊戯室全体を使ったオニごっこであった。オニに捕まった幼児は、修行をすれば再びオニ遊びに戻る事ができた。修行場は遊戯室の舞台に設定されており、修行内

容は、「ケンケンパ」、プラスチックの踏み台を使った「岩渡り」、2リットルペットボトルのあいだに繋がれたゴム紐を跳び越える「両足跳び越し」であった。

運動の好意度調査

運動の好意度調査はACP 活動の実施前後に個別に行われた。事前調査はACP 活動実施12日前、事後調査はACP 活動実施日であった。

幼稚園の遊戯室のコーナーをパーティションで区切り、テーブルをはさんで対象児と調査者が向かい合った。調査者は「これから〇〇ちゃんに教えてもらいたいことがあるんだけど、教えてくれるかな?」と聞き、幼児の承諾の意思を確かめてから調査を開始した。「これから、走ったり、ジャンプしたり、運動しているところが描かれたカードを見せますので、〇〇ちゃんがその運動が好きならそのカードをここ（ポジティブ顔が貼付されているスペース）に入れてください。その運動が好きでもきらいでもなくてふつうだなと思ったらそのカードをここ（ニュートラル顔が貼付されているスペース）に入れてください。その運動があんまり好きじゃないと思ったらここ（ネガティブ顔が貼付されているスペース）に入れてください。」と教示し、調査者は「基本的動き」が描かれた28枚のカードを1枚ずつ幼児に手渡した。

倫理的配慮

本研究は高知大学教育学部部門研究倫理審査委員会において承認された（令和3年度 第4号）。

III. 結果

Table1 は、「基本的動き」の分類結果をまとめたものである。ACP 活動の前後ともに60%以上の対象児が「好き」な動きとして選んでいたのは「寝転ぶ」「歩く」「走る」「跳ぶ」「よける」「すべる」「転がす」であった。一方、ACP 活動の前後ともに40%以上の対象児が「好きではない」動きとして選んでいたのは「ぶら下がる」「運ぶ」「掘る」「引く」であった。

Table1 基本的動きの分類結果 (%)

		立つ	座る	寝転ぶ	起きる	回る	転がる	ぶら下がる	渡る	歩く	走る	はねる	跳ぶ	登る	下りる
活動前	好き	71.4	50.0	71.4	28.6	64.3	42.9	50.0	50.0	64.3	71.4	64.3	71.4	42.9	50.0
	どちらでもない	14.3	21.4	21.4	42.9	14.3	28.6	35.7	7.14	28.6	14.3	21.4	14.3	28.6	21.4
	好きではない	14.3	28.6	7.14	28.6	21.4	28.6	14.3	42.9	7.14	14.3	14.3	14.3	28.6	28.6
活動後	好き	50.0	28.6	64.3	42.9	57.1	50.0	64.3	42.9	64.3	64.3	42.9	64.3	71.4	71.4
	どちらでもない	35.7	42.9	28.6	21.4	14.3	35.7	14.3	21.4	21.4	28.6	28.6	14.3	7.14	21.4
	好きではない	14.3	28.6	7.14	35.7	28.6	14.3	21.4	35.7	14.3	7.14	28.6	21.4	21.4	7.14

Table1 基本的動きの分類結果 (%) (つづき)

		這う	よける	すべる	持つ	運ぶ	投げる	捕る	転がす	蹴る	積む	こぐ	掘る	押す	引く
活動前	好き	42.9	64.3	78.6	57.1	50.0	57.1	57.1	71.4	57.1	57.1	57.1	35.7	57.1	14.3
	どちらでもない	28.6	7.14	21.4	35.7	7.14	28.6	21.4	21.4	28.6	21.4	28.6	35.7	14.3	7.14
	好きではない	28.6	28.6	0	7.14	42.9	14.3	21.4	7.14	14.3	21.4	14.3	28.6	28.6	78.6
活動後	好き	42.9	64.3	78.6	42.9	64.3	64.3	71.4	78.6	71.4	71.4	64.3	42.9	50.0	42.9
	どちらでもない	35.7	14.3	21.4	28.6	21.4	28.6	21.4	21.4	14.3	7.14	14.3	14.3	28.6	14.3
	好きではない	21.4	21.4	0	28.6	14.3	7.14	7.14	0	14.3	21.4	21.4	42.9	21.4	42.9

Table2 基本的動きの好意度得点の平均と標準偏差

		立つ	座る	寝ころ、起きる	回る	転がる	渡る	ぶら下、歩く	走る	はねる	跳ぶ	登る	下りる
活動前	平均	2.57	2.21	2.64	2.00	2.43	2.14	2.36	2.07	2.57	2.57	2.14	2.29
	標準偏差	0.76	0.89	0.63	0.78	0.85	0.86	0.74	1.00	0.65	0.76	0.86	0.91
活動後	平均	2.36	2.00	2.57	2.07	2.29	2.36	2.43	2.07	2.50	2.57	2.14	2.43
	標準偏差	0.75	0.78	0.65	0.92	0.91	0.74	0.85	0.92	0.76	0.65	0.86	0.85

Table2 基本的動きの好意度得点の平均と標準偏差 (つづき)

		這う	よける	すべる	持つ	運ぶ	投げる	捕る	転がす	蹴る	積む	こぐ	掘る	押す	引く
活動前	平均	2.14	2.36	2.79	2.50	2.07	2.43	2.36	2.64	2.43	2.36	2.43	2.07	2.28	1.36
	標準偏差	0.86	0.93	0.11	0.65	1.00	0.76	0.84	0.63	0.76	0.84	0.76	0.83	0.91	0.74
活動後	平均	2.21	2.43	2.79	2.14	2.50	2.57	2.64	2.79	2.57	2.50	2.43	2.00	2.28	2.00
	標準偏差	0.80	0.85	0.11	0.86	0.76	0.65	0.63	0.43	0.76	0.85	0.85	0.96	0.83	0.96

次に、ACP 活動が幼児における運動への好意度に及ぼす影響を検討するために、それぞれの「基本的動き」を「好き」だと判断した場合に3点、「どちらでもない」と判断した場合に2点、「好きではない」と判断した場合に1点として得点化し、好意度得点とした (Table2)。好意度得点にもとづいて、28 の「基本的動き」それぞれに関して対応のある t 検定を行ったところ、「引く」動きに関してのみ有意差があった ($t(13)=2.86, p<.05$)。

IV. 考察

「幼児期運動指針」では、「幼児期に経験する基本的な動きの例」として挙げている 28 の動きを、「体を移動する動き」「体のバランスをとる動き」「用具などを操作する動き」の 3 つのカテゴリーに分けている (Figure1)。以下では、まず、この 3 つのカテゴリーごとに、幼児における運動への好意度を考察する。

「体を移動する動き」についてみると、「歩く」「走る」「跳ぶ」「よける」「すべる」が好きな運動として分類されることが多い傾向にあった。いずれの運動も、日常の保育の中で経験することが多いものである。他児と一緒に保育室へ歩いたり、園庭を走ったり、ダンスでジャンプしたり、ドッジボールでボールをよけたり、園庭にある滑り台で遊んだりする幼児の姿があった。一方、「登る」については、絵カードに描かれているような登り棒への年長児による取り組みは 1 学期にはみられたが、ACP 活動が実施された 2 学期になると年中児が主として取り組むようになっていたことが保育者から報告されている。また、「下りる」に関する絵カードに描かれているジャングルジムは対象園には設置されておらず、「這う」は日常の保育場面ではみられにくい運動である。なお、「はねる」については、スキップするなど、その運動自体は経験されているが、「はねる」という表現が幼児にとっては馴染みのないものであ

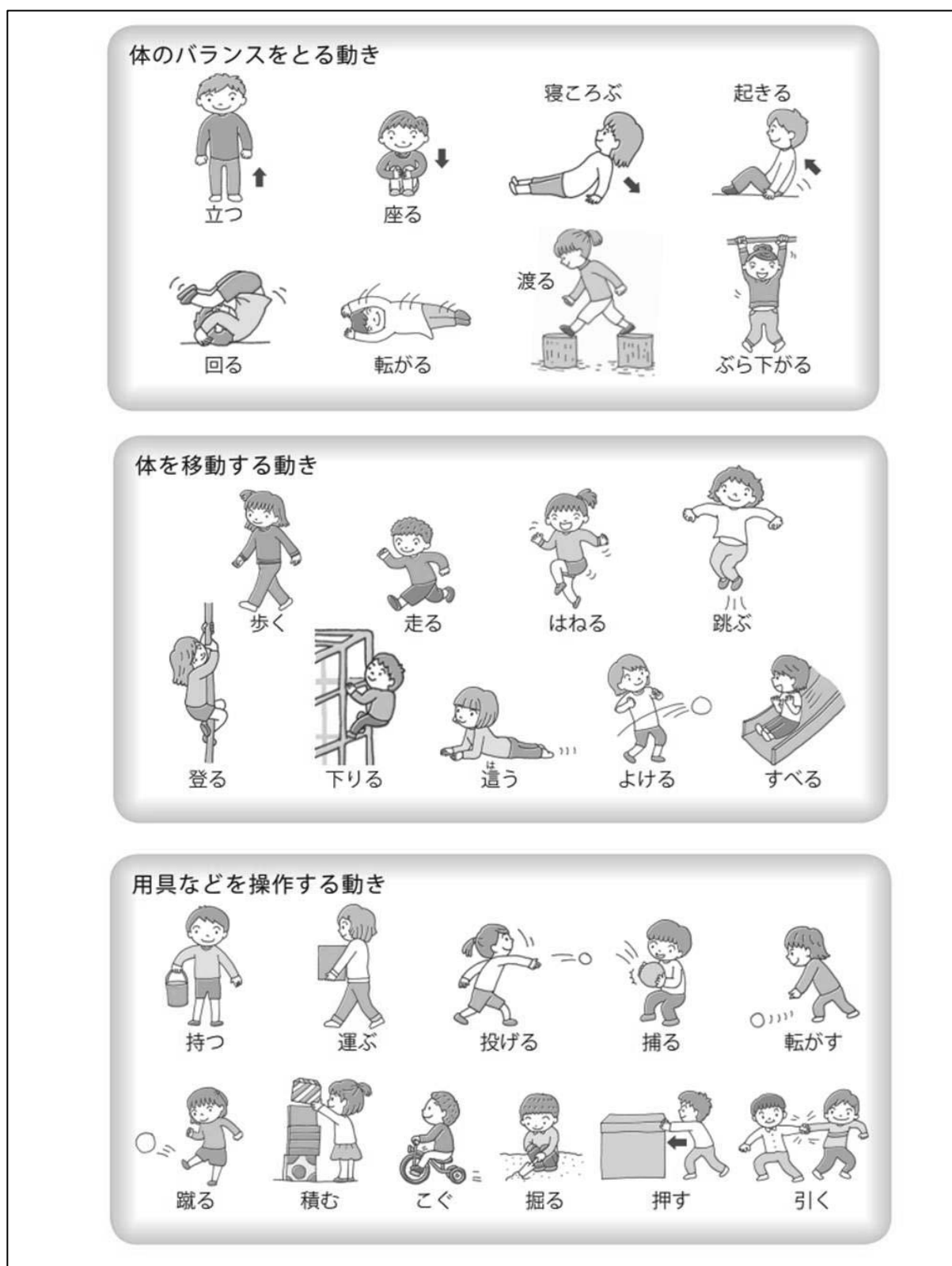


Figure 1 幼児期に経験する基本的な動きの例 (出典：幼児期運動指針ガイドブック (文部科学省)

(https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm)

(2021年10月20日に利用)

つたために、好意度が高くなかった可能性が考えられる。

「体のバランスをとる動き」については、「寝転ぶ」が好きな運動として分類されることが多い傾向にあった。寝転ぶのは体を休める動作であり、心地よい気分になることから「好き」な動きとして選択されやすかったのであろう。一方、「立つ」「座る」「起きる」は、「寝転ぶ」と同様に日常生活で必ず経験している動きであるが、好意度が取り立てて高くなかったのは、それらの運動の楽しさや面白さを感じる経験が少ないためではないだろうか。また、「回る」「転がる」は、日常的に経験する運動ではなく、「回ったり転がったりできる安全な空間」が必要な運動である。このような「体のバランスをとる動き」は「運動」として認識されにくいものであるかもしれないが、保育の場においては、「立つ」「座る」「寝転ぶ」「起きる」「回る」「転がる」といった基本的動き自体がもつ面白さを感じるようなゲームをしたり、幼児が回ったり転がったりできるような安全な空間を準備することが、幼児がこれらの運動を好きになる上で必要であると考えられる。

「渡る」「ぶら下がる」に関しては、「同じ高さの丸太を渡る」絵カード、および「高所にある棒にぶら下がる」絵カードが調査において使用されていた。対象園の庭にはいくつかの丸太や鉄棒は置かれているが、丸太は大きさや高さや置かれている間隔が不揃いであり、鉄棒は低いものであり、絵カードに描かれている動きを経験する機会が少ないために、「渡る」「ぶら下がる」に関する好意度は取り立てて高いものではなかったと考えられる。

「用具などを操作する動き」については、「転がす」が好きな運動として分類されることが多い傾向にあった。

「転がす」に関する絵カードにはボールを転がす幼児の姿が描かれていたが、同様に、ボールを操作する幼児の姿が描かれていた「投げる」「捕る」「蹴る」は、好きな運動として分類されることが比較的少なかった。「投げる」「捕る」「蹴る」動きは、ドッジボールやサッカーなど、勝敗を競うゲームをする中で「できる」「できない」が認識されやすい運動である。それに対して、「転がす」は「できない」ことが少ない運動であるために、好意度が比較的高かったのではないだろうか。

「持つ」「運ぶ」「積む」「押す」動きへの好意度は取り立てて高いものではなかった。これは、荷物を持ったり、運んだり、積んだり、押したりといった手伝いをして感謝されるという経験が少ないことが影響しているのかもしれない。近年、子どもたちにおいて家事を手伝う機会が減少していることは従来から指摘されている（文部科学省,2012b）。保育の場においては、これらの動きを「用具を操作する動き」としてとらえてそのような運動をする機会を増やすことは、運動への好意度だけでなく自己効力感を高める上でも重要であろう。

「こぐ」に関しては、三輪車をこぐ絵カード、「掘る」に関しては、砂場で小さなスコップを使って砂を掘る絵カードが使用されていた。対象園では、三輪車は年少組の前庭でのみ使用されており、年長児は砂場では大きなスコップを使用して遊ぶことが多く、絵カードに描かれている動きを経験する機会が少ないために、「こぐ」「掘る」に関する好意度は取り立てて高いものではなかったと考えられる。

最後に、ACP 活動が幼児における運動への好意度に及ぼす影響については、「引く」運動への好意度に関して活動前と後で有意差があった。保育者や他児とともに ACP プログラムにもとづく運動遊びを経験することによって、幼児が「引く」という運動を好きになったといえよう。本研究で実践した ACP プログラムには「引く」運動を重視する遊びは含まれていなかったが、ACP 活動によって幼児における全般的な運動への好意度が高まり、「引く」という運動は活動前の好意度が最も低いものであったために特にその変化が大きかったと考えられる。

春日・大坪・佐藤・青野(2020)は、小学校2年生を対象に、ACP の概念を取り入れた体育授業が子どもの身体活動量、技能および意識に及ぼす影響を検討している。その結果、ACP 体育群が通常体育群よりも身体活動量が高く、ACP 活動のある体育が通常の体育よりも「好き」だと答えた児童が 80%であったことを報告している。しかし、春日ら(2020)が測定しているのは ACP 活動への好意度であり、全般的な運動への好意度ではなかった。本研究の結果から、ACP 活動は、その活動こととらず、全般的な運動への好意度を高める可能性が示唆された。

従来の研究では、「運動が嫌い」を「運動好き」にするには、「できないことができるようになった楽しさ」を感じることで自己有能感が形成されることが重要であり(岡澤,2003)、運動に関する有能感が形成されることで運動が好きになっていく(杉原,2003)と考えられてきた。しかし、本研究の結果から、幼児期においては、個人的な運動技能を高めることではなく、集団で運動遊びをすることの楽しさを経験することによって、運動好きな子どもを育てることが可能であることが実証的に明らかとされた。

今後の課題は、対象者数を増やし、日常の保育場面において幼児が経験している運動の内容を考慮しながら、ACP 活動が幼児の運動への好意度に及ぼす影響をさらに検討することである。

文献

- 青野博(2018) アクティブ・チャイルド・プログラムが果たす役割 子どもと発育発達,16,1,44-48.
春日晃章・大坪健太・佐藤善人・青野博(2020) アクティブ・チャイルド・プログラムの概念を取り入れた体

- 育授業が子どもの身体活動量、技能向上および意識に及ぼす影響 発育発達研究,86,10-20.
- 文部科学省 (2012a) 幼児期運動指針
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
2021年10月20日閲覧
- 文部科学省 (2012b) 幼児期運動指針ガイドブック
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm
2021年10月20日閲覧
- 森司朗(2003) 幼少期における運動の好き嫌い、体育の科学,53,12,910-914.
- 中澤潤・泉井みずき・本田陽子(2009) 幼児の有能感の認知と遂行との関連—幼児楽観性の視点から— 千葉大学教育学部研究紀要, 57, 137-143.
- 日本スポーツ協会(2018a) 幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム サンライフ企画
- 日本スポーツ協会(2018b) アクティブ・チャイルド・プログラム サンライフ企画
- 岡澤祥訓(2003) 運動好きと自己有能感 体育の科学,53,12,905-909.
- 澤江幸則(2007) 運動 『発達心理学—保育・教育に活かす子どもの理解—』本郷一夫編著,建帛社 pp13-26.
- 杉原隆(2003) 『運動指導の心理学—運動学習とモチベーションからの接近—』大修館書店,pp142-156.
- 渡辺大介・湯澤正通(2012) 5, 6歳児における社会的比較と自己評価 教育心理学研究, 60, 117-126.

付記

本研究は、高知大学さきがけ志金「スポーツを通じた地域貢献事業」の一部を使用して実施した研究である。

